

2月14日までの15日間をもって無事、終了しました。この研修は通称、環境考古学研修と呼ばれ、奈文研の専門研修の中でももっとも古い研修の一つです。数年前は3週間以上をかけて多岐にわたる講義内容を盛り込んでいましたが、いずこも出張旅費の削減のせいか、研修参加者が減ったため、最近では研修期間を2週間に短縮して参加増を期待しているところです。今回は定員を1名オーバーする17名の研修でした。

この研修の特色の一つは、外部講師が13名と多く、その分野も地質、植物、動物と広いことで、受講する側もたいへんだっただろうと思われます。しかし、感想文を見る限りでは、この研修が有意義であり、現場で応用していきたいという意見が大半でした。

一方、2回の経験交流会に担当職員以外の奈文研からの参加者がほとんどなかったことが残念という感想もありました。(埋蔵文化財センター)

## ▲ 速報展示「キトラ古墳壁画」

飛鳥資料館では、昨年の秋に藤原宮跡から出土した木簡の速報展（実物展示）をおこないました。それに続いて、今回2002年2月26日から3月24日までの期間で、昨年12月のキトラ古墳予備調査の際に撮影した画像の写真パネル展をおこないました。

この調査は文化庁が、キトラ古墳壁画保存のために実施したもので、文化財研究所が協力しています。

キトラ古墳については、2001年3月までに明日香村が学術調査をおこない、壁画の保存状態が大変悪いこと、崩落の危険性が極めて高いことが確認されていました。今回の予備調査は、こうした成果を受け、壁画の崩落を防止し保存処理を施すために、実際に石槨の内部へ人が入ることができるかどうかのデータを得ようとしたものです。したがって、撮影も南壁と盗掘坑のできるだけ正確な大きさを測ることに主な狙いを定めています。

しかし、挿入したカメラの位置や角度がこれまでの調査とは微妙に違っていたこともあり、いくつかの新しい画像を得ることができました。例えば、南壁の朱雀、西壁の白虎、東壁下方の人物像らしい像などは、より正面に近い角度から撮影ができ、全体の形がよくわかるようになりました。特に、人物像らしい像は、これによって顔が獣面とわかり、十二



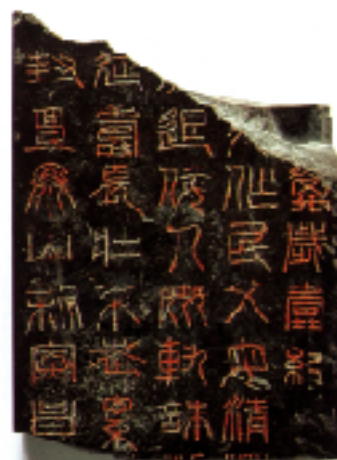
東壁獣面人身像

支像の可能性が高くなりました。

飛鳥資料館では、新聞やテレビなどの報道機関を通じて広く一般に知られることになったキトラ古墳の壁画を、少しでも多くの方々に見ていただければとの思いから、この度、速報展示というかたちでの公開となりました。(飛鳥資料館)

## ▲ 社会科学院考古研究所との共同研究

昨年8月、奈文研が中国社会科学院考古研究所との間で友好共同研究議定書を調印したことはすでにお伝えしたところです。その一環として、このほど劉慶柱所長以下5名の研究者が共同研究のために来日されました。一行は共同研究のあと、所内の新鋭施設や各地の遺跡・博物館などを見学し、3月15日に成田国際空港から帰国の途に就きました。



漢長安城出土玉牒

この間、2月27日には所内で考古研究所の最新発掘成果についての報告会があり、3月9日には、漢長安城での5年間の日中共同発掘調査成果について記念講演会をおこないました。町田所長のあいさつに続いて、劉慶柱所長「漢長安城桂宮出土の玉牒研究」、李毓芳研究員「漢長安城桂宮の発見と研究」、張建峰所員「漢長安城桂宮第4号建築遺構の発掘」の講演がありました。OHP、スライドを用いた話は分かりやすく、好評でした。とくに、劉所長が講演した玉牒は、中国最初の出土品であるだけでなく、新の王莽が泰山で封禅を試みた史料を裏づける貴重な発見として、専門家の驚きを誘っていました。

(平城宮跡発掘調査部)

## ▲ 興福寺中金堂出土鎮壇具の発見 —金色に輝く遺宝—

昨年1月から9月まで続いた興福寺中金堂の調査で、奈良時代初めの創建時の須弥壇築成にともなう鎮壇具の数々が出土しました。興福寺中金堂鎮壇具は、明治の初年に大量に発見され、国宝に指定されています。今回の調査では、明治期に積み直された須弥壇の下層から、明治時代の初めに掘り荒らされた土に紛れ込んだものと思われる<sup>のべがね</sup>金延金や砂金、水晶玉、琥珀玉、瑠璃玉、和同開珎、真珠玉などがみつかっています。1月30日に興福寺で記者発表をおこないましたが、翌日の朝刊では、多くの新聞が一面にカラー写真を掲載する扱いでした。

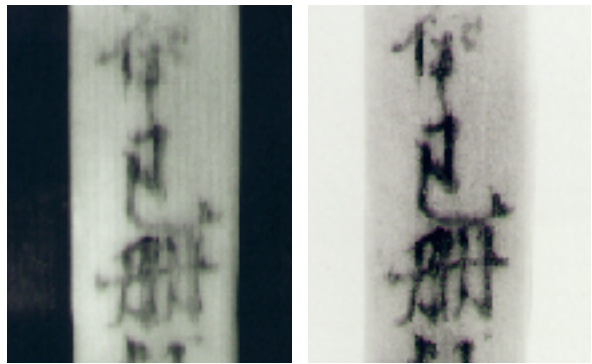
(平城宮跡発掘調査部)



2002年1月31日産経新聞朝刊紙面から

## ▲ デジタルカメラ CCD の赤外線撮影への応用

平城宮跡発掘調査部の写真資料調査室では、日々の撮影の他に文化財の写真に関する保存や応用の技



赤外テレビカメラの画像 デジカメ CCD 方式の画像

術についても、精力的に取り組んでいます。最近注目された仕事は「キトラ古墳」のデジタルカメラでの撮影でしたが、そのほかにも新しいデジタル技術に応用した調査法を新たに提案し、成果をあげています。

デジタルカメラのCCDは、本来は目に見えない赤外線的光もとらえられますが、通常の撮影ではこの光がじゃまになるので意図的にカットしています。これを逆手にとり通常の光をカットして赤外線的光だけをとらえるようにカメラに細工をして撮影すれば、これまで利用されてきた赤外線フィルムやテレビカメラでの赤外線撮影よりも高精度な赤外線画像を得ることができます。奈文研ではこれを出土した木簡資料の判読や文字情報の詳細な画像記録に役立てています。

また、撮影したデジタルデータは保存の面で問題がありますので、高精度なフィルム出力機により白黒フィルムに出力して保存しています。

(平城宮跡発掘調査部)

## ▲ 研究会の開催

### 「わが国鑄銭技術の史的検討」研究集会

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、飛鳥池遺跡から出土した富本銭の鑄造関係遺物をもとに、富本銭の鑄



出土遺物を前にしての検討風景